高松短期大学紀要　第二十号　一～三一頁（一九九〇）

中里介山論のためのノート
『切支丹婦人―佐竹左京大夫の愛妾』のモチーフをめぐって

平島成夫

(一)

中里介山の『切支丹婦人　佐竹左京太夫の愛妾』のモチーフは『切支丹鮮血の遺書』のなかにあるらしい。

たったこれだけのことを書くために、わたしは、とてつもないてまひまかけた。

この笑い話にもならぬ、苦労のしかたを書き記しておくことも意味のないことではあるまい。

解かってみれば、何のことない、あ、そうかって済まされてしまうことも、それを探索している当人は、至極まじめに、自分のありったけの知恵を出して構想し、貧しい情報を組み立て、組みなおして四苦八苦していることもある。一つ解明したつもりで、鬼の首を取った喜びようで、はじめから組みなおすと、もっとわからなくなっていることだってありえるのだ。

なまじっか、有力そうな情報はおとしあなであったりする。

しかも、自分の探り続けている方向が、そこを解明するために近づいていく方向なのか、遠ざかっていく方向なのか、さっぱりわからない。調査の努力が、目的達成のために役立っている保障はひとつもない。この方向は、現在の調査法と情報量では成功しない。こちらの方向でもだめだ、とすれば、この方向だったらどうか…と、考えられるあらゆる方向に手をのばし、足を向け、堂々めぐりを繰り返してみることになる。そして、流行歌ではないが、押してだめなら、ひいてみな、式に、ひっくりかえしたり、切り刻んだり陰画にしてみたり、ためつすがめつ、いろいろの方法で、迫ってみて、結局だめだと見きわめつけることになる。

こうして、この方向にこの方法では解明の道につながらぬと諦めて、消去していく。この消去された方向と方法は、各種の解明の段階で、見切られて捨て去られる。それが累々と折り重なったうえに、もしも解明に成功したとすれば、ある方向と方法がわずかに陽の目をみることになるのである。しかし、それは、ここに口で言うほど、うまくいくはずはない。放棄された試みだけが多い。

ことに、介山のような正統派?的思考を好まぬひとの場合、なまじっかな手には、到底負えないことになる。論理の脈絡が、近代的諸制度の中で整えられた近代的論理とは違ったところで、展開していくことがあるからである。こうした面で、介山という作家は、理解されがた

い部分を多く残し、疎縁になっていくことになるのかもしれない。

しかし、日本近代、わずかに百年。その間に構築された、近代的な論理が、前近代の論理展開の算術的な発展に比べて、幾何的数的であったとしても、人間の歴史全体にとって、何ほどのことがあるか。近代百年の思いあがりが、こんにちの混乱を生んだことを思いみるならば、近代的であることよりは、もっと底深い人間のどろどろの情念の中に、作品の基底部を据え続けた、介山の作品の史的位置を問い直す必要が生じるかもしれないのだ。

とはいっても、文壇の離合集散とも無縁に、文学運動の潮流とも埒外に、作品を創り続けた介山は、外部的な要因から解明する途を閉ざしてしまっているから、しろうとの、孤立した好事家なんどの手に負える一面さえも、見せてはくれぬということになる。こうして、半ば、諦めた介山解明の努力も、何か気がかりになって、三月もたつと、再び深刻に考えこんでいるという因果なことになってしまっているのである。

ところで、『切支丹婦人　佐竹左京大夫の愛妾』であるが、清楚で温和、慎しみ深い少女でありながら、信仰をえたのち、激しい情熱を胸に秘してひたむきに生き、神への殉難に捧げられていく娘、お清、城中の豪華な生活のなかで、主君義宣の寵愛をうけている現状に自足できないで、立場を崩壊に導くことによって現状をつき破り、脱出する道を発見する、お浜の方、このふたりの女性像は、介山の人間像のある典型であると思われる。

この作品についての評価は、筑摩書房版『中里介山全集　第十四巻』所集の橋本峯雄の端的な解説に尽きていて、何も加えるものはない。それは、

『切支丹婦人』は徳川初期のキリシタン断圧の一物語として、佐竹左京大夫の愛妾のお浜の方の入信であるが、その彼女の入信の動機は明らかに描かれているとはいえないけれども、その腰元お清の狂信的な言動はよくとらえられている。むしろ、この作品は、入信者の周囲のものの反応を正確にとらえることによつて、キリスト教がいかにわが国の風土と文化とに異質のものであつたかを見事に描いているといえるであろう。〈註一〉

と、述べている。

ここでは直接関係ないことであるが、この橋本峯雄の解説には、重要な誤植が一つ二つあるので、今後、誤られてはいけないから、この機会に注意を喚起しておきたい。

『切支丹夜話』は、大正八年四月号からの「主婦之友」に連載され、のち昭和十七年十一月に『聖母の画像』（原題『島原城』を改題した『原主水』を再改題）とともに『切支丹夜話』として「大菩薩峠刊行会」から単行本にされた。

と、述べている部分であるが、はじめの『切支丹夜話』は『切支丹婦人』の誤植が訂正されずに印刷されたと見たほうがいいようである。「のち昭和十七年十一月に」といっているが、「昭和七年十一月に」の誤植で、「十」が消されずに、印刷されているようである。

この「お清」や「お浜の方」の造形は、介山のなかで、どのような結晶のしかたで可能になったのか、という疑問がわたしを捕えてから、久しい。

挙措動作、感情の波立ち方、いわば人物の血や肉は、介山の好みによっていろどられているに違いないし、事件の描き方も介山一流の解釈によって、なりたっているはずだ、と、わたしは考えていた。別のところに、骨組みだけをもっている人物があって、それを介山流に、鋳直したはずで、その原像ともいえる人間像と、介山の描いた人間像との距離を測定することで、介山の造形法を考えようとしていたのである。それは、また、歴史的な事件と、介山の作品の描く事件の相違を追うことで、介山の解釈の方法論がつかまえられると考えようとしていたのである。

この考え方は、介山の場合、ことに有効な方法であったとし、介山自身も、隠し立てたりしないで、手のうちをあまりあっけなく見せたりして、興醒めになることさえあったりするほどだから、ほかに方法をもたぬわたしの、ただ一つの定法であったりもしたのである。ことに、この『切支丹婦人』には、この方法をそそる表現がきちんとはめこまれ、むしろ、そのことで、この作品の真実味が動かしがたく表示されるということになっているから、なおさらのことである。

これは、『切支丹婦人』の結びの部分である。

それから夜の十二時まで水の中に浸けられながら経文唱へてゐたりダッショ老異人は、其の後に主基督の名を唱へて息を引き取つた。その少し前にお清は同じやうに水の中で凍え死んだ。

水戸に帰つてゐたお浜の方へ此の知らせが着いたのは、やや後の事であつた。お浜の方の驚きや悲しみはどれ程であつたらう。記録にはたゞお浜の方が其の後正当な夫、それは労働者に近いほどの夫をもつて、公然と結婚を行ひ正しき夫婦となつて生涯を送つたといふ事の外には書いてない。〈註二〉

「記録には……いふ事の外には書いていない。」というのだ。ここ

で、どういう記録なのか、興味を示さないものはいないだろう。

介山は、古記録類に、強い関心を持ち続け、文章家としての直観的な鋭い価値意識は、文章の評価を正しく決定することがあったようであるが、読書の傾向は、正統派の示すものよりは、多分に片よりをもっていたといっていいようである。しかし、自分の作品へ投影されてくる原型は、著作権に異常な執着を示した事件があるように、作品の中でことわることが多いようである。

『大菩薩峠』の中で、不良旗本の神尾主膳が、不良旗本であった勝夢酔小吉『夢酔独言』をむさぼり読むという場面を設定して、『夢酔独言』をながながと引用することで、評価してみせたようなやり方である。〈註三〉『夢酔独言』は、こんにちでこそ、言文一致体の、歯切れのよい江戸ことばで書かれた、近代語確立のための金字塔とでも呼べるような評価のされ方をしており、坂口安吾が『日本文化私観』の中で激賞して以来、見直されてきたのであるが、介山は、主著『大菩薩峠』の中で、神尾主膳をしてうならせるのである。

それはともかく、この「お浜の方」が「正当な夫、それは労働者に近いほどの夫をもって、公然と結婚を行ひ正しき夫婦となつて生涯を送った」と書いてある「記録」は何なのか気になりはじめたのである。

このことについては、わたしは、むしろ、楽観的でさえあった。すぐわかる。ヒントは、すぐそこに転がっている。

と、こう考えていたのである。

(二)

わたしが、いま、使っているテキストは、大菩薩峠刊行会版の「昭和七年十一月十日」と「西暦一九三一年」と併記された介山隠士署名の序「切支丹夜話序文」をもつ『聖母の画像』『切支丹婦人』合冊のものであって、昭和七年十二月八日三版となっている。

そこには『切支丹婦人』は、それ程まで手を加えて再録されてはいないのに、『聖母の画像』即ち『島原城（前篇）』に、相当な手を加えてまとめられているらしく見える。『切支丹夜話』の『聖母の画像』には、要約圧縮されて、原主水一行処刑の場が一章にまとめられているが、『島原城（前篇）』には、六月分の新聞掲載量で描かれている。『聖母の画像』ではカットされた部分に次の記述がある。

この時の火刑は原主水を初めとして、都合五十余人であつた。京都で捕まつた者も、大阪で捕まつた者も、西国筋から引かれて来た者もあるいはわざわざ名乗って出て来た者もあつた。それを悉く火

刑にして終えと云う将軍の命令であつた。

真先に馬に乗せられて送られて来たのは、原主水であつた。その次はデザンジという宣教師。その次はガルブという宣教師。何れも多年日本に切支丹を弘めて居た老異国人であつた。この三人だけは馬に乗せられて、あとは首に麻縄を巻いて、その縄の一端で両腕を後ろに縛つた儘で歩かせられる。

こうして送られて来た切支丹一行は、刑場で五十何本の十字架に結びつけられて、火刑にあうことになる。そして、この節のおわりは、次のように結ばれる。

「日本西教史」にはこの時の火刑の切支丹宗徒の名が原主水を筆頭に三十六名まで挙げられてある。

と、いうのだ。

これで、『島原城（前篇）』の「原主水処刑」の下絵は明らかになる。

『日本西教史』明治十一年六月、太政官本局翻訳係識との署名をもつ「日本西教史序」によってはじまる御用印行所、日本橋呉服町拾二番地　坂上半七　発行の準公文書的な、上・下二巻の大部な書籍である。上巻・下巻ともに千三百頁を越えた大著であり、「官廳ニ於テ国王親カラ記セリ」と註され、「ウエルサイニ於テ此ノ准可状ヲ賜与ス」と記された「仏蘭西国王ヨリ賜与セラレシ所ノ版権准可状」を巻頭の「序」「例言」に併掲しているものである。これは、「序」にも「例言」にも、原書の「序」にもあるとおり「ゼジュウイット」教会ジアン・クラセ著の、エティエン・パピヨン版『イストワール・ド・レグリーズ・デュ・ヂャポン』日本耶蘇教会史の訳である。〈註四〉

『日本西教史』下巻に、三頁にわたって、三十六人の殉教者の名が記されている。〈註五〉

ドム・ゼアン・ファラモン（原主水）

師父　ゼロームー・デ・ザンジ

師父　フランソアー・ガルブ

レオン・タケウァゴンスケ

と続いていくわけである。

それでは、原主水捕縛のことは、どのように記しているかというと、次のようである。

江戸ニ於テ、残酷ナル一大事ヲ見ントスル端緒ヲ開キタル者ハ、千六百十二年ニ当リ、政府十二人ノ基督信者ヲ放遂セシ事是ナリ。其内一人ハ、ゼアン・ファラモント称シ、富貴ニシテ、威勢アル人ニ

シテ、自ラ世塵ヲ避クルニアラザレバ、親シク天主ヲ感覚スル事能ハズト思惟シ、故ニ、政廳ニ奉仕センヨリ、其身ヲ追放セラレタルヲ以テ、最モ愉快トセリ。暴厲ノ君主ハ、ゼアン・ファラモンノ却テ罰ヲ受ケシヲ歓喜セシト伝聞シ、暴逆ノ所行ヲ加ヘ、悉ク、手足ノ指ヲ截断シ、烙鋲ヲ以テ、額上ニ十字形ヲ印シ、又、諸人ニ令ヲ下シ、之レヲ扶助シ、或ハ、止宿セシムル事ヲ禁ゼリ。〈註六〉

と記しており、また、原主水処刑の部分は次のようにある。

前将軍、江戸に至ルヲ以テ、彼ノ布令ハ、其意ニ因テ生ジ来ルノ実報ヲ得タリ。此時、地方官ハ、在獄ノ基督教徒、五十名ノ審判ヲ請ヒケレバ、前将軍、其口供ヲ、新将軍ニ送付シ、新将軍ハ五十名ノ教徒、悉ク大罪ニ処スベキ旨ヲ決断セリ。官吏、直チニ、此断案ヲ獄中に伝示シ、先ヅ、第一ニ、彼ノ欣然死刑ヲ待ツ所ノゼローム・デ・ザンジ師ヲ引出セリ。吏人ハ、師父ノ足ニ繋ケタル鋲械ヲ撤去シ、一条ノ麻縄ヲ以テ、頸上ニ結ヒ、其手ヲ背後ニ縛セリ。フランソワー・ガルブ師、及ビ、其他ノ囚徒モ、皆同様ニ縛セラレ、都城ノ街衢ヲ徒歩シテ、刑場に至リ、ドム・ゼアン・ファラモンハ、馬上ニ撃ガル。此人ハ足指ニ痛所アルト、将軍ノ親族タルトニ因ルナリ。又、デ・ザンジ師、ガルブ師モ馬ニ乗リ、其他ハ何レモ徒歩セリ。

介山の『島原城（前篇）』の原主水にかかわる部分は、この『日本西教史』の記述に、実に忠実に従っていることがわかる。ガルブ師、デ・ザンジ師の最期の説教も『西教史』の中に感動的である。

「大菩薩峠刊行会」版には、見ることはできないが、『日本西教史』の、介山の切支丹ものにおける位置は、おのずからわかろうというものと、わたしは短絡した。

『切支丹婦人』の「お浜の方」の水戸帰還後の生き方を印したという「記録」は、この『日本西教史』をおいて、ほかにあろうか、というわけである。わたしは、この『日本西教史』を丹念に読みはじめることになる。

お浜の方、お清、リダッショ師、義宣、歌女、元和七年春、正室那須殿、伊兵衛、出羽、院内、オコロ岩、ルイスなど手がかりとなりそうなものを『日本西教史』の中で見出そうと、蚤取り眼を血走らせたのである。そして、『日本西教史』の表現とともに、そのまわりの、できる限りの資料を探渉しなければならなくなって、途方にくれることになったのである。

久保田城のことから、秋田実季の移封と、義宣の秋田転封、車一族の

壮烈な反逆、憤死まで、視野におさめる必要が生まれてくる。介山が考えた、出羽、久保田に老異人が姿をあらわす、あのあらわれ方は、現実には考えられないことに近いのかもしれない。が、しかし、『切支丹婦人』に出現する、切支丹の神父は、きわめて類型的である。それは、まるで、次の叙述に近い。

『南蛮寺興廃記』の冒頭の一部に、つぎのようにある。

……九州肥前の領主竜造寺高重の領地、長崎の港に南蛮船が一隻入港した。この船に奇妙な姿の人が一人乗り込んできていた。その人の丈は九尺余り、胴にくらべ頭は小さく、顔面は赤くて、眼は丸く、鼻高々として、側を見る時には肩をすりあげる。口は大きく耳まで及び、歯は馬の歯のように雪よりも白い。爪は熊の手足に似ている〈という有様〉。髪は鼠色であって、年のころは五十ばかりとも見えた。その名をウルガンバテレンといった。南蛮のキリシタン国の人であって、天帝の宗門を弘めるために渡来したのであった。毎日のように長崎の神社仏閣をさまよい歩いていたが、その異相を見ようと人々が群をなして集まっていた。中にはその異相を画にえがき、書付に書きとめて中国地方へ伝え〈た人があり〉やがて京都にも伝わった。……〈註七〉〈海老沢有道訳、平凡社、東洋文庫14による〉

これは、介山の『切支丹婦人』とは、直接の関係はない。が、この作品の冒頭と極めて似通った表現になっているので紹介した。わたしは、この冒頭の似通いようで、このさきに、もっと直接的な関係があると予想して、失望したのである。初めてあらわれる異国人の表現は、ここに極まっていたのだ。

『日本西教史』下巻、第十五章の叙述のなかに、千六百二十年、元和六年の布教活動の記録として、次の節を読むことができる。

奥羽山地に分断された奥陸と出羽を、同一の布教管区にもつ切支丹の布教者たちが、背骨に似た山地を横断して、活動していたことがわかる。それは、例えば、古川から鳴子、鬼首峠を乗越えて、雄勝へ降りると、院内の銀山は割に近い。あるいは、北上から横手への乗越へも、現在の国道一〇八、また、さきの一〇七号線で考えられるような、なまやさしさではなかったろうことは、容易に想像される。

陸奥ノ国ト、出羽ノ国異ニ、一帯ノ峻嶺アリ。積雪、頂ヲ蔽ヒ、谷ヲ埋メ、之レヲ経過スルハ、六日ヲ費シ、途中、動モスレバ、雪中ニ埋没スルノ患アリ。因テ、此所ハ、幾多ノ奉教者、信心ノ為メニ罪ヲ受ケ、配流セラレテ、辛苦スルノ地ナリ。耶蘇教社ノ某師ハ、哀憐ノ情ニ堪ヘズ、蔦蘿ヲ攀ヂ、積雪ヲ踏ミ、山谷ヲ越ヘ、始メテ鉱山ニ使役セラルル人ニ逢ヒ、其懺悔ヲ受ケ、聖体ヲ授与シ、又、

獣皮商ニ扮シテ、奉教者ノ貧癩院ニ入リ、病者ノ懺悔ヲ聴キ、聖体ヲ授与シ、此ニ、留ル十五日ニシテ、出羽ヲ去リ、三日ニシテ津軽ニ入リ、奉教者ヲ慰問ス。『日本西教史』第十五章

陰惨な虐殺と、神へ身を捧げる殉教者の赤誠にみたされている『日本西教史』のなかで、火刑、斬刑の阿鼻叫喚と並んで極寒の積雪のなかに、水責めの極刑がある。その極刑に幾度か耐え、遂に天国へ召されていった師父がある。

千六百二十四年二月二十八日、ジャアク・カラワイルという管区長であるポルトガル出身の神父が殉難した。この神父について、『日本西教史』は、次のように語ってくれている。一度は日本から追放されて、再度潜入して布教に従事し、日本の北端、北海道にまで、足跡を印した不屈の基督者であったようである。

ジャアク・カラワイル師ハ、葡萄牙国コニンブル州ノ人ナリ。年十七、始メテ教社ニ入リ、千六百年、印度ニ赴キ、鋭意日本ニ於テ死セント決セリ。然ルニ、師父ハ支那ニ留マリ、尚ホ、其学ヲ修メ、九年ヲ経テ、始テ其志ス所ノ地（日本ヲ云）ニ到着シ、一年間ハ其国語ヲ学ビ、二年間アマクサ島ニ教務ヲ整理シ、終ニ都ニ到ルニ、教師虐遇ノ事起ルニ由リ、止ムヲ得ズ長崎ニ退居シ、他ノ師父ト共ニ謫罪ヲ蒙リ、千六百十四年、マーテマカヲ地方ニ住シ、其後、諸師父ト共ニ、コシンシンヌ（交趾支那）ニ派出シ、勤勉シテ善美ノ結果ヲ致セリ。

其翌年、再ビ日本ニ派遣セラレ、曽テ忠正ヲ尽シ、却テ謫罪ヲ蒙リ、無限ノ惨愁ヲ致セシ地ヲ経過セル事此ニ三回、遂ニ蝦夷地方ニ達シ、始メテ彌撒経式ヲ修セリ。是、此地ニ於テ、此式ヲ講セル第一開場ナリ。而シテ、出羽、及ビ異州ノ地ヲ巡回シ、備サニ、艱苦ヲ嘗ル事ハ、既ニデザンジ師ノ傳ニ説クト異ナルナク、遂ニ、許多ノ礼拝堂ヲ建築シ、又、多ク異宗者ニ洗礼ヲ授ケレバ、人、或ハ其生命ヲ全フセヨト、勧ル者アレドモ、之ヲ顧ミズ、同伴ノ徒ト共ニ、衆多ノ人命ヲ救ハント欲シ、自ラ訴ヘテ、死ニ就キタリ。時ニ六十四、教社ニ在ル事三十年、日本ニ在ル事十五年ナリ。（日本西教史（下）第十六章）

(三)

この、ペール・ジャアク・カラワイル師の布教の実態は、具体的にどのようなものであったか、やや、長文になるが、『西教史』の語る

ところを聞いてみよう。

これは、カラワイル師が、再度入国し、東北地方を働き場として活動し、仙台城主政宗の変節以来、緊迫してくる情勢のなかで、追いつめられながらも、信者を保護し、天国を説き続け、遂に捕縛されて、殉教していくまでの、カラワイル師晩年にあたる部分である。政宗は支倉常長を海外に派遣するなど、開明的なポーズを示したこともあったが、ここではすでに、暴君と化した姿で描き出されている。

将軍ノ宗徒ヲ嫌悪スル、至ラザル所ナク、或ハ、火ヲ以テ焚殺シ、或ハ、刀剣ヲ以テ斬殺セリ。此レに由テ、諸侯ハ、皆、其鼻息ヲ伺ヒ、其歓心ヲ得ン事願フノ徒ナレバ、将軍ノ所為ト同ク、酷虐ヲ行ヒ、其中ニ、仙台国主政宗ハ、其魁ト云フベシ。爰ニ、教会ノ長タルペール・ヂャク・カラワイル師ハ、イダケ国ニ於テ、教務ヲ行ヒ、後、居ヲ仙台ニ占メ、近傍所々ヲ巡回シ、又、ミナクノ地ニ遷住セリ。此地ハ、聖教徒信者ノ一紳董ヂヤカン後藤氏ノ領地ナリ。政宗ハ、嘗テ、之レヲ知ラザルニ非ザレドモ、後藤氏の門閥ト、功労に因テ、暫ク教会中ニ在ルヲ許セリ。然ルニ、政宗ノ江戸ニ在ル時、基督宗徒ヲ虐遇スルノ事起リ……政宗ハ之レヲ聞キ、将軍ノ怒ニ触レ、禍ノ己レニ及バン事ヲ畏レ、……家臣ヲ仙台ニ遣リ、宜ク、基督宗徒ヲ咎懲スベク、……云ヒ送レリ。……後藤ノ親友ニ、下田大膳ナル者アリ。……後藤ニ告テ曰ク、君、須ラク主君平日ノ恩遇ヲ思ヒ、速ヤカニ改宗スベシ、ト。後藤ハ決然之ニ対ヘテ云フ、我ガ君ノ吾レニ於ケル、恩ノ深キハ則深シ。然リト雖モ、天主ノ恩ノ深キ事、尚ホ之レニ勝レリ。……ト。（日本西教史（下）第十六章）

貴族信者のひとり、塩釜の城主、五島寿庵のことであるが遂に節をまげず、硬骨の信者として、政宗の懐柔にも、知友の恩情にも動揺しないのである。

此後モ、亦、屢後藤ヲ諫ムル者アレドモ、皆従ハズシテ、却テ之レヲペール・カラワイル師ニ告ゲ、共ニ死ニ就クノ備ヲナセリ。師父ハ、勉テ諸宗徒ノ懺悔ヲ聞キ、而シテ、禍ヲ家主ニ及ボサン事ヲ恐レ、近傍ニ小屋ヲ営ミ、死ニ至ルマデモ随従セント欲スル所ノ、宗徒二名ヲ同伴シ、之レニ住ス。……

……スウヲ（周防）ハ、後藤ノ住セル仙台ノ地方ト、ペール・カラワイル師ノ住セルオロシヲトニ、兵隊ヲ遣リ、諸宗徒ヲ捕ヘ、之レヲ檻倉ニ拘留セントス。……後藤ノ住セル地方ニ遣リ、其家ヲ劫掠シ、近傍ニ火ヲ放チタリ。後藤ハ、之レヲ見テ、莞爾トシテ咲ヒ、悔ル色ナク、負担ノ重任ヲ卸セル如キノ思ヲナシ、徐々ト其地ヲ去リ、政宗ノ領地ヨリ遠カラザル、南部ノ地ニ退キタリ。オロシヲニ

在ル宗徒ハ、スウヨノ兵士ノ剛強ナル勢ヲ揮フヲ見テ、恐懼措ク所ヲ知ラズ。山間ニ建築セシ、カラワイル師ノ住セル草堂ニ入ル者、六十余人、然ルニ、一人ノ間諜、此事ヲ見聞シ、直チニスウヨニ告知セシヨ以テ、スウヨハ、忽チ兵士ヲ出シ、之レヲ捕ントス。師父ハ、兵士ノ猛進シ来ルヨ見テ、草堂ヲ出デ、其面前ニ至リ、彼ノ牧羊奴ガ、牝羊ヲ助ケントスル如ク、兵士ニ告ゲテ云ク、汝等ノ捜索スル基督教師ハ、即チ余ナリ。今、汝等ノタメニ縄縛セラルルモ、憾トセズ。唯願クハ、幸ニ此等ノ窮民ヲシテ、安寧ヲ保タシメヨト。彼ノ無慚ナル兵士等ハ、此言ヲ用ヒズ。師父ヲ捕ヘ、其余モ共ニ縛シ、厳冬冱寒ニ裸体ト為シ、ミナクノ司刑官ノ許ヘ拘引セリ。……

翌朝、黎明ニ至リ、此人々ヨミドルサマト云フ、市街ニ伴ヒ往カントス。此ノ一行ノ内、二名ノ老人アリ。一ハ其名ヨアレキシス幸右衛門ト称シ、一ハ、ドミニック・ドサイト称ス。時ニ、積雪路ヨ埋メ、且、山路艱峻ナルニ因リ、二人ハ、老脚ニシテ、衆人ト歩ヨ同フスルコト能ハズ。然レドモ、惨毒ナル兵士ハ、一点ノ隣情ナク、忽チ両人ヨ殺害セリ。此殉教ハ、千六百二十六年二月九日ナリ。

（日本西教史（下）十七章）

この殉教に前後して、『西教史』は、次の殉難の記録をつぶさに描くが、ただ表示するにとどめる。

（火刑　寛永元年二月一日（一六二四）

マルクカワロエ、その妻　マリー

アンドレー・カモン、ポール・サンニロ

（刎首　十一月）　ピエル・キンコー

（凍死）　ゼアン・アンザイ、その妻　アンヨ

（斬首）　従弟　アンドレーイエモン、僕徒　ルーイ

（日本西教史　第十六章）

こうして、カラワイル師の殉教のための布石は準備されていく。そして、第一回目の処刑は、次のように実行に移される。

ジャアク・カラワイル師、及ビ、其同伴者ハ、此時ニ際シ、仙台ニ来ルヨ以テ、同ジク酷虐ヨ受ケ、此年、二月十八日ハ、日本暦ノ歳末ニ方タリ、此日、囚徒ヨ牢獄ヨリ出シ、河辺ニ赴ケリ。其岸ニ、獄卒ノ予メ掘リシ一坑アリテ、其周囲ニ木柵ヨ設ケ、坑中ノ水ハ深サ二尺ニ余リ、囚徒、既ニ此場に到ル時、衣ヨ脱セシメテ、裸体トナシ、而シテ、一人ヅツ、木柱ニ繋着シ、凍水中ニ坐センムル事、三時間、師父等ハ非常ノ忍耐力ヨ以テ、其苦責ニ堪エタリ。

カラワイル師ハ、教旨ヨ説キ　処身ノ法ヨ示シテ、衆ヨ励マシ、而シテ、頭ヨ低レ、深ク歓察スル所アルガ如シ。……師父等ハ、凍

結セル水中ニ在ル事、三時、其後司刑官命ジテ、之レヲ水中ヨリ揚ゲ、尚ホ、永ク其苦楚ヲ受ケシメントス。然レドモ、寒気既ニ身体ニ徹シ、四肢其用ヲナス能ハズ、皆岸辺ノ砂上ニ倒レ伏ス。此際、マテヤス・シシワト、ジユリヤン・ゼルモンハ、同時ニ凍死セリ。カラワイル師ハ独リ倒レズ。日本人ノ為セル如ク、砂上ニ跌坐シ、掌ヲ合セ、頭ヲ低レ、顔色平和ニシテ、謙遜ノ貌ヲ顕ハシケレバ、観ル者、感賞セザルハナシ。（日本西教史　第十六章）

カラワイル師は歳末の極寒の責苦にも耐えて、生き続け、伴侶たちを力づけることをやめない。そして、再度の極刑に曝されることになるのである。

宗徒ハ、再ビ、牢内ニ監禁セラレ、二月二十八日ニ至リ、牢内ノ辛苦百端アリト雖モ、其中ニ於テ、皆火刑ヲ被ルベキ用意ヲナセリ。

此日、払暁、牢外ニ出サレケレバ、必火刑ニ処セラルルナラント思ヒシニ、又、河辺ニ伴ハレ、坑中に投ゼラレ、其日ヲ過セリ。夜ニ入リ、寒気益烈シク、積雪体ヲ没シ、朔風膚ヲ裂キ、更ニ一層ノ苦ヲ増シタリ。レオント称スル一人ハ、気息奄々トシテ、死ニ瀕セリ。師父ハ、之ニ接近シ、謂テ曰ク、

弟子、今暫ク忍耐セヨ。其苦ハ、瞬時ニ消散シ、忽チ快楽無量ノ天国ニ至ラン。

レオンハ、此説諭ヲ聞キ、精神大ニ定マリ、即時ニ瞑目シ、アンドレヱ・ニヱモン、及ヒ、マテユ・マゴビヨヱハ、少許ニシテ、死ニ至レリ。此中、マテヤス・タラエモンハ、既ニ死期ノ近キヲ知リ、師父ヲ呼ンデ云ク、

尊師、今我死期已ニ至レリ。茲ニ永訣ス。

師父ハ、之レニ答ヘテ曰ク、

汝、瞑目ノ時至ルカ。願クハ、真神ノ恵佑ニ死シ、真神ノ側ニ往ケ。此応答、了リ、マテヤスハ、安ンジテ気息ヲ絶チケリ。

此時、衆徒、皆死スト雖モ、カラワイル師、一人、勇者ノ独リ、敵陣ニ当リテ、殿スル如クナレバ、観者ハ、已ニ夜ニ入ルヲ以テ、各帰リ去リ、唯、宗徒ノ観者ノミ残レリ。師父ノ登天セシハ、已ニ夜半ノ頃ナリ。其水中ニ苦シメラレシ第一次ハ、十時間ニ余リ、第二次ハ、十五時間ナリシ。……師父、及ビ、衆徒ノ殉教セシハ、実ニ、千六百二十四年二月二十八日ニシテ、翌朝ニ至リ、其死体ヲ水中ヨリ出シ、之レヲ寸断シテ后、河流ニ投ゼリ。然ルニ、其后チ、宗徒ハ師父、及ビ、其他ノ首級ヲ探リ得テ、之レヲ尊重保護セリ。（日本西教史　第十六章）

ところで、これは、仙台藩、伊達政宗の治下での話ではないか。わ

たしが関心を示さねばならぬのは、秋田（久保田）の佐竹義宣の治下での事件であるはずだったのだ。

アシタ（秋田）国ハ、此年（一六二五年）、一戦場トナリ、最モ荒蕪ヲ致ス。然リト雖モ、宗教ハ、大ニ其敵ヲ敗ルヲ得タリ。国主、ヨシノフ（義宣）ハ、常ニ、クホタニ住シケルガ、一日、其臣下ニ向ヒ、神仏宗教ニ帰復シ、基督宗教ヲ棄絶スベキコトヲ命令セシニヨリ、酷責ノ苦辛ヲ恐怖シテ、其令ニ従ヒタルモノアリ。之レニ従ハザルモノハ、其国ヲ脱奔シ、最モ信実熱心ナル四十二名、其妻子ト共ニ獄ニ繋ル。（西教史　第十七章）

四十二名中
三二名　クボタ城外三里ノ地　　熢火ノ火刑　七月
残りは院内イナイに送られ、二十五名　斬首

と、秋田での禁教の事件が『日本西教史』のなかに書きこまれている。婦人の殉教はなかったのか。次の二件がある。

一婦アリ、名ヲモニックト云フ。其固執、非常ナリ。因テ、之レヲ其家ノ柱ニ結着シテ、二十五人ヲ以テ、看守シ、飲食モ与ヘズ。モニックハ二人ノ子アリ。長ハ、トウマスト称シ、年、甫テ十歳。次ハ、三歳。亦飲食ヲ与ヘズ。此無罪ノ小児ハ、飢喝ニ迫リ、母ニ向ヒ、涕泣シテ麺包ヲ乞ヒ、トウマスノ謂ヘルハ、我慈母ヨ、我父ハ、何レノ所ニ行キシヤ、何レノ時、麺包ヲ携ヘ帰ルベキヤ、ト。弟ハ、未ダ乳ヲ呑ムヲ以テ、憐ムベキ声ヲ発シ、母ニ乳ヲ乞ヘリ。因テ、母ニ二児ノ苦痛スルヲ覩テ、断腸ニ堪ヘズト雖モ、信仰心ヲ欺クヨリ、寧ロ死ヲ致スベシ、ト、決意シ、身体ヲ動揺セズ。……四箇月ノ間、囚人ノタメニ、厨下ニ於テ、使侍セシメラル。是、此婦ノ非常ニシテ致ス所ナリ。暫クシテ、此婦モ亦、他ノモノト共ニ獄中ニ囚セラレタリ。

是ノ時、又、クボタニ、二十七歳ノ婦人、オウィワ・ミニックト称スル者アリ。其夫ハ、聖教ヲ信ゼズ。故ニ、之レヲ離婚ス。オウィワハ、却テ、異教ノ夫ニ従ハザルヲ得ル事ヲ、悦ベリ。然ルニ、父ノ家ニ於テハ、旧トノ夫ニ勝ル仇敵アリ。是ハ其兄弟ナリ。オウィワヲ再ビ異教徒者ニ嫁セシメントナシ、親戚来リ集リテ、此婦ノ善行ヲ破リ、己レノ意ニ従ハセシメント図リケレバ、オウィワハ之レヲ知リ、予ハ生涯不犯ノ誓ヒヲ立ツ。因テ再嫁ノ想ナシ、ト明言セリ。兄弟ハ、此レヲ聴キ、大ニ憤リ、オウィワヲ厨下ニ苦役シ、一年間、奴婢ノ業ヲ執ラシメシニ、之レヲ能ク忍耐シテ、賤業ニ従事セ

リ。……オウィワハ、日本ニ於テ、婚ヲ否ムノ明証トスル風習ニ従ガヒ、自ラ其頭髪ヲ斬リ、之レヲ父母ニ示セリ。……残忍ナル父母ハ、此弱齢ナル婦人ヲ捕ヘ、雪中ニ引出シ、先ヅ一枚ノ蓆ヲ敷キ、以テ血ヲ受ルノ処トシ蓋シ之レヲ殺サントスルナリ、然ル後、オウィワニ対シ、今此処ニ於テ、死ニ就クヤ、又、心ヲ改メ、宗教ヲ転スベキヤ、ト云ヘリ。オウィワ、此言ヲ聞キ、直チニ跪キ、天ニ対シテ両手ヲ挙ゲ、父母ノ傍ニ其ノ歌ヲ伸ベ、終ニ害セラレタリ。（日本西教史　第十七章）

二人の婦人の殉教が感動的に話られている。しかし、ここには、「お清」「お浜の方」の片鱗もない。むしろ、介山の女性像は観念的で描き足りない面がないではないのに、ここで殉教していくモニックとオウィワ・ミニックは動的で、彫りの深い塑像となっている。もしも、介山が『日本西教史』のこの部分を、自分の『切支丹婦人』の下絵としてもっていたならば、もっと違った女性像が造形されたはずではなかったか。発表場所が「主婦之友」という、いわゆる良風美俗、反社会性拒否の体質をもっていたということによるのか、「お清」にせよ、「お浜の方」にせよ、または、この事件にせよ、きれいごと過ぎるように思われる。殉教というのは、一見、ロマンチンズムに覆れがちであるが、もっと凄惨な、どろどろした血腥いものであるはずだ。介山が、オウィワ・ミニックに、または、モニックに、『切支丹婦人』の構想の背後で出会っていたら、「お浜の方」の入信を描くにしても、あのような表現をしたであろうか。とすると、『日本西教史』の他の部分に、それが見出せるか。

右の二件が詳細に記録されているが、佐竹侯愛妾が切支丹婦人となり、「正当な結婚」をしたという事実を記録している部分は見出せない。

司祭が極寒の水責めに多くの信者とともに殉教した事件はたしかにあった。しかも、その司祭は奥羽の管区長として、布教活動をしていた。それは、いかにも、介山の『切支丹婦人』の発想に影響したかに見える。しかし、人名、場所、それに、人物像の違いは歴然としている。この違いは、介山の創作活動の型から考えると、決定的といってもいいほどのものになる。

『日本西教史』は、介山の『切支丹婦人』の下絵ではないのだ。わたしは、『日本西教史』と『原主水』の類縁性にだまされて、類推していたにすぎない。

話は再び、白紙に還る。

(四)

介山は、ともかく、『切支丹婦人』でいったのだ。「記録には……といふ事の外には書いていない」と。書いてあるというよりは、真実味がある表現になっている。どのようなものであれ、何れかに、これだけのことは書かれているに違いない。愛妾お浜の方は、基督教の容認する生活態度に還って、生涯を送った、という事が。

わたしの暗中模索は再びはじまる。

新村出の筑摩版全集『南蛮更紗』〈註八〉をはじめとする。切支丹文学関係の文献から『妙点問答』『破提宇子』、ルイス・フロイスの『日本史』四巻　ヴァリニャーノの『日本巡察記』〈註九〉に至るまで手当り次第に切支丹関係に総当りするよりしかたがない。時期的にも、介山が参考にしたはずのない文献にまで、また、この作品の事件とかかわりもないはずの文献にも、わずか、一行か、二行かでも、関係のある語句はないのか、探しまわることになる。『こんてむつすむん地』『ドチリナ・キリシタン』から『イソホのハブラス』〈註一〇〉までの翻訳も。しかも、その前後にある解説にひかれて見なければならなくなる。そして、気の多いわたしは、いつの間にか、切支丹文学、切支丹研究史がおもしろくなってしまっている。

はっと気付いたとき、「お浜の方」も、介山はいなくなっているのにびっくりする。ミイラ取りがミイラになって、切支丹のとりこになっている。そして、おいおい、いろんなことがわかってくる。

『日本西教史』は、わたしがテキストに使っている明治十一年版のあとに、明治二十七年、大正二年、十五年、昭和六年に版を重ねたらしい。それは、明治四年、条約改正の目的で、欧米に派遣された岩倉、伊藤の使節が、日本のキリスト教迫害を非難せられたこと、など気運が生じ、直接には、駐仏公使であった鮫島員信の進言によって、翻訳されることになったということもわかってくる。さらに、木下杢太郎の作品〈註一一〉から、海老沢有道のキリシタン史まで、介山には、かかわりもないことながら、眺めることになる。

こうしているうちに、パジェスの『日本キリスト教史』〈註一二〉に到達したのである。これは、のちに『日本切支丹宗門史』として岩波文庫で上梓され、上、中、下三巻よりなるものであることがわかった。

その、中の巻に「奥州には、イエズス会の神父が二人ゐた。」とし、神父たちは、異教人に教えを説き、信者をたずねて力づける旅をし続けていたように描かれており、次のような叙述が見出される。ここにあったのだ。

出羽と津軽の諸国も亦、訪問を受けた。奥州から出羽へ入込むためには、暫く、危険で容易に交通もなり難く、匍つて越さねばならないやうな所が多い山を越すのである。イエズス会の一神父は坑夫として旅行し、この姿で、仙北、秋田両地方の信者を訪問し、そこに十五日間滞在した。

出羽の領主（佐竹右京大夫義宣）は、正室の外に一人の妾を蓄へてゐたが、この妾は、隣の邸に住んでゐた。暫く前に教へをきき、予て洗礼を受けたいと思つてゐたが、悲しい身の上それがかなはなかつた。彼女の生活は、徳も高く、実に信心深い人のそれであつた。彼女は、長時間、聖母の像の前に跪いてゐた。召使は皆キリシタンで、彼女は、この人々に聖い生涯を送るやうに勧め、又若干の未信者を改宗させた。然るに、宣教師は、危険のためにこの第二のサマリヤの女を訪問することが出来なかつた。〈註一三〉（日本切支丹宗門史　第四章　一六一九年〈出羽、津軽とその流人〉の項）

ここに「お浜の方」の原型がある。佐竹義宣の愛妾で、洗礼をうけたがっている婦人があった。しかし、神父は、彼女に、洗礼をさずけることができないで、旅立っている。

一六二〇年に活動していたイエズス会の修道者の名簿があるが、次のひとの名が読める。

司祭二十二人と修士六人の名簿のうち

ヒエロニモ・デ・アンゼリス師…四誓願司祭、奥州の長老

ヨハネ・カルバリオ師……四誓願司祭、出羽と奥州に於ける長老の顧問

ヨハネ・マテオ師（アダミ）……四誓願司祭、奥州に於ける長老の顧問・忠告役

修士　ヨハネ・ヤマ……奥州在

また、『日本切支丹宗門史』には、次の叙述で、奥州の神職や情勢について報告している部分がある。

彼は、アルバロ・フェルナンデスとマルガリタ・ルイスとの間に、coimbreコインブラで生れた。彼は、一五九四年十七才の時、生れた町でイエズス会に入つた。彼は、一六〇〇年十九人の他の人と共に乗船し、一六〇一年マカオに渡り、そこで哲学と神学の勉強を終つた。一六〇九年、彼は一年間語学の勉強をした後、日本に渡つた。二年間を天草で送り、それから上方に遣られた。一六一四年に流され、一六一五年の初め、ナポリ人なるフランシスコ・ブソミ神父と共に、交趾支那に送られた。カルバリオ師は、この国に住んでゐる日本人の商人の救霊を命ぜられてゐた。二人の教師は大に王の優遇を受け

交趾支那伝道の基礎を据ゑた。一時迫害が起ると、カルバリオ師は、一六一六年マカオに帰つた。同年、彼は再び日本に入り、初め大村で働いた。一六一七年、彼は第四の誓願を立て、奥州でデ・アンゼリス師と再会し、その布教を助けた。デ・カルバリオ神父は、三度津軽の流人を訪問した。（日本切支丹宗門史　第五章　一六二〇年註三一に記される）

Diego de Carvalho
デイエゴ・デ・カルバリオ（日本名　長崎五郎右衛門）神父は奥州において、次のような活動をしていることが記されている。

奥州では、千人余の未信者がヒエロニモ・デ・アンゼリス、デイエゴ・デ・カルバリオ（日本名　長崎五郎右衛門）、ヨハネ・マテオ・アダミ、マルチノ式見（市佐衛門）の神父達から洗礼を受けた。政宗を第一とするこれら諸国の大名達は、国法に従ふためには、迫害を我が義務とした。大使派遣（支倉一行）のために幕府から疑をかけられ、また公方様を倒すために、イスパニヤ王との同盟を求めたと噂された彼政宗は、身の潔白を證せんとし、領内キリシタンの根絶を決意した。

……

或る村では、聖母の会の会員三百人が、全員一致で強硬に抵抗することを申合せた。ところが土地が耕作されずにしまふといけないので、彼等は自由に放置された。

十一月六日金曜日、奥州の城下町水沢に於て、政宗の家老大膳殿（石母田大膳）の臣、タジマ（但馬）殿の命令によつて、六人のキリシタンが斬首された。即ち、ヨハキムとその妻、トマスといふ名のキリシタン二人、それに他二人のキリシタンであるが、その名は不明である。ヨハキムは、三日路の所にある城下町の仙台に連れて行かれ、役人から訊問されたが、頑として応じなかつた。……彼は、刑場に引いて行かれ、救世主と同じやうな聖なる鎖その他の器具を見て、幸福にふるへた。共に洗礼を受けた彼の妻は、徳の点でも彼と同様であつたが、殉教まで一緒であつた。……

ヨハキムとアンナとは、他の四人の者と共に斬首された。彼等の首級は曝され、次のやうな立札が立てられた。『この夫婦はイエズス・キリストの信仰の棄絶を肯んぜざるに依り、今月二日斬首せられたるものなり。』彼等の遺骸は、とり集められ、キリシタンによつて埋葬された。（日本切支丹宗門史　第五章　一六二〇（元和六年）〈奥州に於ける六人の殉教者〉の項）

また、

……

カルバリオ師は、雪のサンタ・マリヤの祝日に、ミサを献てた。

……キリシタン達は、鶴首して宣教師を待つてゐた。彼等は大抵、或る者は同国で、また或る者は奥州で、アンゼリス師から洗礼を受けた人々であつた。若干の者は、上方の地方から来た者であつた。

神父は、告解を聴くために、松前に一週間を送り、それから一日路の所にある坑夫達の許に行つた。道は甚だ嶮しく峨々たる山を乗り越えたのであるが、其処からは帝国中の最大部が見渡された。彼は、鑛山の極く近くの隠れ家のある村で、ミサ聖祭を献て、そこで聖母の被昇天を祝つた。（日本切支丹宗門史　第五章　一六二〇年〈出羽、津軽、及び蝦夷に於けるディエゴ・デ・カルバリオ神父の伝道〉の項）

このカルバリオ師は、再び秋田を訪れて、佐竹侯の愛妾に洗礼を授けることになる。その苦難みちた旅をさらに、次のように記録している。

ここで、佐竹右京大夫義宣と、その愛妾との決定的な別離が、内的必然性をもって、語られることになっている。ただ、愛妾の名前がOnichamaオニシャマとなっており、お浜という名とどうつながっているか。nicを抜けば、オハマと読めないことはないが、附会にすぎるかもしれない。しかし、ともかく、義宣の愛妾の入信はありえたのである。それを記録しているものもあることがわかった。

松前を出る時には、商品にも人にも課される税を支払はなければならなかつた。同日、津軽に到着し、そこで手形を登記して貰ひ、新しい税を支払つた。旅人は、港から一日半路の処にあつて、イエズス会の悦びであり栄冠である福者たる追放人の住んでゐた津軽の城下町高岡（現今の弘前）へ行つた。イエズス・キリストの赫々たる證人は、聖き生活を送つてじつと耐へてゐた。そこの或る村には、メアコ（京都）の追放者がゐた。少し離れて共同の家には、大阪の追放者がをり、また他の二つの村には、北国（越前、加賀、能登、越中の地方）の追放者がゐた。北国の追放者の中には、この試練の場所で宿命の死を遂げたヨハネ休閑（浮田秀家）の息子三人がゐた。

……

津軽の関所を通過することは、諺にある位困難であつたが、キリシタンなる役人の計ひで、取調べを受けずに、通過することが出来た。

神父は、随分前から告解が出来なかつた南部のキリシタンに会つた。彼は、彼等の中に留まること三日、伝道士が国内を信者に同行して、改宗者や嬰児に洗礼を授けることが出来た。……

神父は、初めて行つた時、自分の許へ来られなかつた城中の夫人の告解を聴くために、再び久保田を訪ねた。そこでは、洗礼を望んでゐる人々の中に、領主佐竹右京大夫（義宣）の妾オニシャマ（お西様か？）がゐた。この婦人は正室と変る所なく、豪奢に暮してゐた。前年と同様この年も、彼女は殊勝な望みを一切神父に打明けた。少し前、領主はオニシャマに阿弥陀の寺に参詣せよと勧めた。彼女は、キリシタンである召使の女中達を従へ、ただ建物を見るために出かけた。然し、この迷信に必要な形式である偶像教の数珠は持たず、また聊かも罪になるやうな行為をしなかつた。佐竹は、このため憤慨し、将に離婚しかねまじき剣幕であつた。彼女は、この賜暇は洗礼を受ける機会を早めるので、寧ろ悦びに満てる希望として神父に報告した。なほ、彼女は既に前から宗教的の修行を積み、侍女達が宗教的の義務を果すのを熱心に見守つてゐた。

神父は、最後の伝道として、仙北地方の院内の銀山を訪問した。

（日本切支丹宗門史　第七章　一六二〇年〈前述〉）

佐竹義宣の愛妾の入信は、周囲にさまざまの反響を生まずにはいない。それは、迫害に耐えていた信者を力づけるものであったかもしれないが、迫害者たちは、さらに危機意識をもって、惨忍さを加えていくということになりかねないものである。

(五)

四人の司祭と一人の司祭志願者が、武蔵、奥州、出羽、並にその他東国で働いてゐた。彼等は、千五百人の成人に洗礼を授けた。彼等は、出羽の地方に、初めて入つた。これは、この地方に落ちついたキリシタンから城下町のタカタ（○酒田）に呼ばれたディオゴ・デ・カルバリオ師であつた。彼はタカタ（○酒田）から秋田の久保田（○現今の秋田）に行つた。日本人の司祭マルチノ・シキミ（○式見）は、南部の城下町盛岡に足跡を印した最初の人であつた。……

奥州と出羽の地方では、迫害は、主に仙北と秋田の地方で猛威を振つた。それには、二つの主なる理由があつた。第一は、佐竹の第二夫人で、阿弥陀を拝むことを拒絶したニシン・マルンドノ（○西ノ丸殿）の追放であつた。教会の敵は、勢を得て、キリシタンの親戚を棄教させることを望んだ。……

ディオゴ・デ・カルバリオ神父の現はれたことは、キリシタンを慰め、彼等に弁護の手段を得させた。若干の信者が、追放されたばかりであつた。（日本切支丹宗門史　第七章　一六二二年　〈註一三四の中〉）

カルバリオ神父の身辺にも危機は刻々迫っている。迫害の嵐は、全国に吹き荒れていたのである。そして、多くの伴侶をともなって、殉教することになっていくのであるが、それは次のように記されている。長いが引用することにしたい。

将軍は、自ら江戸で、盛んに懲罰を加へつつも、他の諸侯に対しては、決して迫害を強制してはをらなかつた。然し、多くの大名は、奴隷の如く之に倣つた。

一番危険を感じてゐた政宗は、家老にキリシタンを調査せよと、命令を下した。彼が麾下の役人は、各々管轄内で名簿を調製しなければならなかつた。ディオゴ・デ・カルバリオ神父は、当時イエズス会の長老として、仙台に滞在し、町のキリシタンを慰めたり、附近の地方を訪問したりしてゐた。彼は、政宗が公然その臣下にキリシタンたることを許してゐた、有徳の家臣ヨハネ後藤（寿庵）の封土、三分に降誕祭を祝ひに来たところであつた。（ヨハネ後藤は軟硬の手段によつて棄教をすすめられる）

……然し、爾来彼は殉教を期待し、秘蹟によつて、心の準備としてゐた。彼は、信仰の声明を書類にして、政宗に送ることとしたが、この誓詞の中に、命は捨てても、魂は犠牲にしなくないといふ誠実を述べた。この時、デ・カルバリオ師は、宿主の宅でそのまま死ぬことを心配して、彼と別れたが、これは、政宗の領内に留るためであつた。何となれば、彼は、時至れば、羊の群と共に、死ぬ覚悟はしてゐたが、鉱山地方の下嵐江（？オコロ）の谷間に隠れ家としてマチヤス・イヒヨーエ（伊兵衛）の家を選び、この家では、主屋に続いて狭い荒屋があつた。彼は、伝道士も従者も、連れてゐなかつた。時に、ヨハネ後藤は、奥州の北方にある、南部の州に追放された。……

下嵐江村のキリシタン六十人は、谷間に退いて神父の隣りに隠れ家を建てた。役人は、無効ながら主だつた所に調査をした後、雪の上につけられた足跡を見付けて、キリシタンの許までやつて来た。先づ、隠れ家は踏み荒され、キリシタンは捕はれ繋れた。大抵の者は裸であつた。何となれば、卒達が、彼等の着物までも剥ぎとつたからであつた。デ・カルバリオ師は、この哀れな様を見て、役人の許に名乗り出で『私は、この哀れな者達の父ぢゃ。』といつた。さうして、彼は縛られるやうにと両手を差出した。……

囚徒たちは、三分に着くと、役所の前で、朝から「アベ・マリヤ」（御告の祈）を歌ふ頃まで、寒さにおそはれ、雪を浴びつつたたずんでゐた。……

神父は、二人のキリシタン、即ちマテオ孫兵衛（遠江の者安間孫兵衛）とパウロ・キンスケと共に、役人の前に引出された。師は、名前と祖国と説教者の身分を名乗り、悦んでイエズス・キリストの

為には、血を捧げるとつけ加へた。二人の改宗者は彼等の身分、即ち一人は宣教師の宿主、他は弟子だと申立てた。……

夜明けに、難教者たちは、二日路離れた所の水沢にやられた。皆手を縛られ、肩につけた小旗には、キリシタン名が書いてあつた。……

日本では、旅は、雪が多い為に、実に難儀であつた。二人の老人のアレキシス・コイヱモロ（幸右衛門）とドミンゴス・ドーザイ（道斎）とは、行列に加はることが出来なかつた。彼等は、二月九日に、坐らされ、その場で、斬首された。彼等の遺骸は、ずたずたに試斬りにされた。……

二人の役人は、時に、囚徒たちを、仙台の家老周防（茂庭周防）の許に遣り、その意に任せた。……

老医師ヨハネ・アンザイとその妻の凍水の水責めと、烈風の中のひきまわし、遂に凍死による殉教が語られる。そして、

日本の年も、暮に近づいてゐた。そこで家老の中の若干は、デ・カルバリオ師とその宿主の処刑を新年の盛儀がすむまで、延期したいと考へてゐた。然るに、他の意見が勝を占めて、この年の最終の日、即ち二月十八日（陽暦）に、彼等の殉教が始まつた。

午後二時、神父と伴侶とは、川の方に連れて行かれた。川岸に、深さ僅か二バルム、直径二十バルム、流れの水を引込むやうに水溜（水牢といふ）が堀られ、杭が打込まれた。着物を剥ぎとられた難教者たちは、この氷つた水の中に漬けられ、坐らされ、杭にしつかり縛られた。この拷問中、犠牲者たちは、イエズス・マリヤに救を求め、祝福のみ口にした。……

この酷い拷問三時間の後、彼等は引上げられた。何となれば、役人は、彼等の死ぬことをまだ許してはをらなかつたからである。彼等は酷い苦しみやうで、やつと動ける程であつた。寒さのために硬くなり、彼等は、痛い手足に何の慰撫も見出せず砂の上にたふれた。この間に、神父は、日本流に足を組んで坐り、手を胸の上に揃へて、首をたれ、祈禱をはじめた。

時に、殉教者中の二人、即ち神父の宿主マテオ・ジヒョーヱ（次兵衛）とジュリアン・ジヱモン（次兵衛門）とが、砂の上で息を引取つた。……

次いで、生き残つた人々は、二月二十二日、日本暦の四日まで牢舎にぶち込まれた。

時に、彼等は、裸にして氷のはつた溜（所謂水牢）に漬けられて、同じ杭に結へられ、水は膝まで来る中を、力のつづく限り、否応なしに立たされてゐた。それから彼等は、胸の辺りまで水に漬かつて

坐らされた。水が氷る瞬間、即ち宵まで、この二様の姿勢を代る代るとらされた。……

この時、氷のような風が吹いてゐた。彼の肺腑をさすやうな息は、或は大気を吸ひ込み、或は雪に混り、羊毛をちぎつたやうに吹散らしてゐた。聖なる殉教者たちは、風に息のつまる思ひをし、また雪に吹き曝されて、死ぬ時を予想してゐた。彼等は、神の加護を祈願し、互に先に息をひきとつた者が、天主の前で、兄弟のために耐へる力をお願ひすることを約束して、心からの告別をし合つた。デ・カルバリオ師は、相変らず、冷静で、また深く瞑想して、善良なる御主、天主たるイエズスを楽しんでゐるやうに見えた。

最初に息をひきとつたのは、寒さの為にひどく難儀をしたレオ今右衛門（佐度今右衛門で若松の者）で、彼はひどく苦しんでゐた。そして神父は、彼に愛をもつて「束の間ですぞ、もう少ししたら、苦しみはなくなりますぞ。」と繰返した。そこで、レオは、イエズスとマリヤを依り頼みして、息を引取るまでよく耐へた。

二番目は、アントニオ佐左衛門（高橋佐左衛門・小浜の者）で、第三番目は、マチヤス正太夫（小山正太夫・越前の者）であつた。

……

マチヤスの後に、間もなく、アンデレア二右衛門（野口二右衛門・豊前の者）、マチヤス孫兵衛（安間孫兵衛・遠江の者）マチヤス太郎右衛門（若松太郎右衛門・但馬の者）が続いた。

……それは夜の五時のことで、人通りが繁かつた。勇敢な殉教者の指揮者は、その前に、最愛の弟子たちとイエズス・キリストの息子たちを遣はす慰めをもつてゐた。なほ、彼は皆の後に生残り、宛石のやうに最後まで動かずにゐた。彼の死に立ちあふことを請うた若干のキリシタンたちは、彼が大体真夜中にやつと息を引取つたと確言した。

朝、遺骸は引取られた、それは、これを寸断して川に棄てるためであつた。然し、キリシタン達は、デ・カルバリオ師の首と、他に四つの首を手に入れることが出来た。

この殉教は、伊達正宗の命令により、家老の一人茂庭周防の手で行はれた。

デ・カルバリオ師は、四十六才、イエズス会に在ること三十年であるが、彼は、日本及び交趾支那の伝道に十五年を過して来たのであつた。（日本切支丹宗門史　第九章　一六二四年（寛永元年）の項の前三分の一にあたる部分）

デ・カルバリオ師は、自分を信じ、神の膝下に帰っていくべき伴侶たちを、最後まで見送って、崩れそうな心を励まし続けたのである。こうして、異国で、異教徒の教化にあたった基督者は、神に殉じたの

である。

それとともに、デ・カルバリオ師に殉じていく魂もあった。師の宿主となることで、危険を冒していた信仰者たちは、師の殉教に殉ずるように、極刑によって処分されていく。

政宗の封建領主としての圧政、幕府に対しての忠誠心の過剰サービスは、殉教者を次々と生むことになるのである。

他の殉教者たちは、左の如し。二月の始め、仙台で、アンデレア・カモン（掃部）とその子パウロ・サンクロ（三九郎）が火炙りになつた。同時に仙台で、パウロ・シンゾ（新蔵）が斬首され、彼の屍は、千々に切りさいなまれた。二月十二日、仙台で、ヨハネ・アンザイ（三廻の安さい）の親戚のアンデレア・イチヱモン（市右衛門）と、同じくアンザイの僕ルイス、このルイスは火炙りにあつた上、二人は斬首された。同じ頃、奥州の登米で、デ・カルバリオ師の旧宿主シモン・フィコヱモン（彦右衛門）シモンの妻モニカ、外、子供の某は斬首になつた。薄衣では、ガスパルト・イチヱモン（市右衛門）が斬首になつた。

八月十八日、出羽で、アンデレア・ファチゾ（八蔵）が斬首された。（日本切支丹宗門史　第九章　一六二四年　註六による）

(六)

一方、仙台の政宗と同様、外様大名の雄として、幕府の注視を受けていた、出羽の佐竹義宣も、幕府への忠誠心の過剰サービスで、幕府にこび続けることになる。そして、それは具体的には、切支丹迫害という型をもって表現されることになる。

出羽大部の領主で、領主で、秋田地方の城下町久保田（現今の秋田）に城を営んでゐた佐竹義宣右京大夫は、江戸の迫害に倣はんと欲し、家老梅津半右衛門にキリシタンを訴へ出るやうに命じた。厳命が発せられ、二十一人の武家も入れて四十二人の者が投獄せられた。……

七月十八日、久保田から三リュー離れた処に三十二本の柱が立てられた。……火が点けられると、難行者たちは、次の言葉を歌ひ出した「主よ我等を憐み給へ、我等を憐み給へ」彼等は、髪の毛さへ焼けない熢火で炙られた。……

牢内に留まつてゐた夥しい難教者たちは、間もなく、死によつて慰めを受けた。彼等の数は、なほ久保田から三日路のところに位する銀山で有名であり、夥しい労働者を集めてゐた仙北の地方の院内

に連れて行かれた二十五人の改宗者によって、増加した。

七月二十六日、久保田で、五十人のキリシタンが、斬罪に遭った。二十五人は、前から入牢中の者で、二十五人は新参の者であった。彼等の遺骸は、キリシタンによって持出された。

八月四日、久保田で、仙北の寺沢から来た十四人のキリシタンが斬首された。

八月十六日、仙北の善知鳥のキリシタン十三人が、ヨカタ（横手）で斬首された。

九月十八日、薄井の百姓四人が、同じ場所で斬首された。最後に、その他夥しい人々が、別々に、或は二三人一緒に殉教した。……

出羽では、この年だけで、百九人の殉教者が数へられた。

なほ、同年、この試練の中で、この地方で成人の洗礼を受けたものが三百人あつた。（日本切支丹宗門史　第九章　一六二四年）

出羽で吹き荒れる切支丹迫害の嵐の中で、教に殉じて極刑によって昇天する霊が幾多もある。しかも、けなげな殉教の女性像もいくつかある。

これは、まさに、有力な手がかりであるかのように見える。しかし、「お清」にあたる女性が、ここでもやはり発見できないのが気がかりになる。

仙台で、牢につながれているデ・カルバリオ神父の前にある女性は、マテオの妻サビナであり、棄教しない人間として描かれ、マルコ賀兵衛の妻マリヤは、熢火で焼殺されるように記されている。ここにも「お清」の下絵は発見できない。

また、出羽の犠牲者のなかには、あたる者はないのか。そこに見えるのは、ディエゴ加倉井二郎右衛門の妻ルシヤ、火炙りでおどかされるサビナ、子供の飢えをおとりに棄教を迫られる貴婦人モニカ、ルカ・タロピョーエの妻テクラなどであるが、そこに「お清」に投影したものを発見することは、おそらく困難であろう。

ただ、院内の囚徒で処刑された。信者の会の会頭は、ルイス・オーツ・サブロエモンといわれたと註されており、仙北の寺沢で処刑された十四人の筆頭は、ヨハネ・ウマイ・ロクザエモンというと註されているが、彼は、初め、ルイスと呼ばれており、牢内で奇蹟を行なうことがあったと記されている。これは、二人とも、男性であるが、ルイスと呼ばれている。『切支丹婦人』では、極寒の河原で、神父がお清に霊名で呼びかけるように描かれていて、それは、ルイスである。

ここに何かの関連があるのかどうか。

『日本切支丹宗門史』の註のなかに、記しておいてよいことが一、二ある。

牢内で、実に美しい或る夫人は屢々囚徒たちを訪問して助けてゐた。どこから来たのかと訊かれると、彼女は、『妾は、城から参りました。』と答へた。然し、城でもその他の場所でも、誰も、そんなことを話すのは嘗て聞いたことのないことであつた。

また、

佐竹殿（○義宣）に棄てられた妾の召使の一人、モニカ・オイワ（○お岩）は、兄弟から、或る異教徒と結婚するやうに勧められたが、断然拒絶した。そこで兄弟は、彼女に、一年間台所で働き、もつと卑しい仕事をするやう押しつけた。親類の者から、なほも強制されるので、彼女は、浮世を棄てた印に髪を切つた。親類の者は、立腹して、彼女を外に連れ出し、地面に敷かれた蓆を示して、『汝、教を棄てよ、さもなくば殺してしまふ。』といつた。彼女が跪くと、親類の者の一人が首を斬つた。……

と、註されている。

ところで、佐竹右京大夫義宣を、介山は、なぜ、わざわざ左京大夫と書きかえたのか。介山が『日本切支丹宗門史』またはその原書によっているならば、右京大夫を、左京大夫と書きちがえることは、およそあるまい。

新羅三郎義光を祖とする佐竹一族は、その子孫の最右翼に位置し、徳川家康も手を出すことのできない名家であった。武田・逸見・秋山・小笠原・南部・平賀・大内も同族であり、太郎昌義が佐竹を名乗って、下野・常陸を支配する実力者として、関東武士の中核をなして来た。その後十代、上杉憲定の二男義人が、佐竹左馬頭義盛の養嗣子となり、右京大夫となってから、八代、右京大夫義宣まで、五代にわたって右京大夫に叙任する家系である。さらに、義宣から、明治維新時の義堯まで十一代、その間、七代にわたって、右京大夫を叙任している。左京大夫もないではないが、義人の子、義俊、実定のわずかに二人が室町末期に、左京大夫を歴任しているのが知られている。

佐竹といえば、右京大夫というのが、普通のことであると、介山が知っていたかどうかは知らぬ。左右のわずかばかりの違いといって済ますこともできるが、このわずかばかりの違いが決定的違いを証するものとなるかもしれないのだ。

ここまで来たら、慎重にかまえるほうが得策というものであろう。

むしろ、介山は、この『日本切支丹宗門史』を知らないときめたほうがいい。このレオン・パジェス Leon Pages の Histoire de la Religion Chretienne au Japon depuis 1598 jusqua 1651, comprenant les faits relatifs aux deux cent cinq martyrs beatifies

le 7 juillet 1867.　『一八六七年七月七日、福者に挙げられたる殉教者二百五人に関する事蹟を採録せる。一五九八年より一六五一年に至る。日本切支丹宗門史』と呼ばれる著作が、翻訳され、岩波文庫に収録されて、比較的入手しやすくなったのは、昭和十三年以降のことに属する。

わたしが、ここに使用しているテキストは、昭和十四年十一月十日発行の第二刷本である。

すると、当然、介山が、このクリセル神父校閲、吉田小五郎訳の、岩波文庫本をこの作品に利用することは、不可能であったことになる。この著作に、極めて近い、もっと別の著作がどこにかなければならない。介山が物理的にも入手可能な著作であるべきである。姉崎博士の切支丹についての著作、ことに『切支丹迫害史中の人物事跡』などは時間が食い違う。

(七)

わたしは、介山の『切支丹婦人』の下絵を求めて、再び、さまよい出ることになる。

割に手軽で、活字も大きく、古典文学乱読のために、便利しているのは、朝日新聞社の日本古典全書である。これに、『吉利支丹文学全集』上下が収録されている。新村出、柊源一校註となっている。この上巻に、二百頁近くにわたって、切支丹についての各種の解説が、柊源一の筆でのっている。

それは、三部から成っている。

一、吉利支丹文学の思想的背景

――キリスト教の成立から日本渡来まで――

二、吉利支丹文学成立の地盤

――吉利子丹布教史をたどりつつ――

三、吉利支丹文学

この「三、吉利子丹文学」は、七章から成っている。こと第七章は「吉利支丹文学研究のあと」となり、文学研究だけでなく、「吉利支丹研究史」ともよべる。日本における、切支丹関係出版物の解説をかねた歴史の読み物になっている。

その中に、次のような解説があるのがわかった。

フランス人宣教師ヴィリヨン師は、吉利支丹の殉教者を顕彰するため、加古義一に命じて『日本聖人鮮血遺書』(明治二十二年初版)を編集出版させたが、その典拠としたのはパジェスの『日本キリス

ト教史』（一八六九年パリ刊・翻訳は岩波文庫日本吉利支丹宗門史）であって、用語文体に稚拙な点はあるが、内容的には日本西教史よりもすぐれたもので、後にも版を重ねた。

明治二十二年初版で、版を重ねているという。介山が入手するにふさわしい時期でもある。しかも、パジェスの『日本吉利支丹宗門史』が典拠になっているという。稀覯本といえるようになっているかもしれない、『日本聖人鮮血遺書』を探しまわることになる。

そして、遂にめぐりあった『切支丹鮮血遺書』には、予想したとおりのことが記されているのである。切支丹の神父は、秋田を訪れ、蝦夷地、津軽に足あとを印し、南部、再び秋田をめぐって、佐竹義宣の愛妾に洗礼を授けるのである。その間の、困苦のさまが、つぶさに叙され、日本の異教徒たちの迫害にあって、多くの信者たちを見守り、励まし続けながら、酷寒の河原で、水漬けの責苦のなかで、殉教者として、昇天していくことになる。

それは『日本吉利支丹宗門史』にあるがままの事蹟で詳細にわたって叙述されている。これの中に次のような記録がある。

……此地（久保田・現秋田）は、数多の異教人が洗礼を望みて、其便を待居たれば、忽ち大勢群集し、争て洗礼を授り、領主佐竹左京大夫義宣の夫人を初め、城中の貴族婦人に、洗礼を望むもの多かりしかど、義宣これを許さず。故に洗礼を授り得ずして、深く悲み居たるが、義宣の愛妾、お浜の方は、大に、義宣の圧制を厭ひ、道理を述て、諫言したれど、聴入なく、偶ま、義宣と共に寺へ詣でしが、他の甲乙が、念仏するを見て、偶像を拝するは、万物の長たる人間の最も恥る所なり、とて、その理由を述しより、義宣の怒に触れ、遂に放逐せられしに、却つて自由の身と成しを喜び、霊父の許へ走り来て、洗礼を授り、其後、良縁を求めて、公然、婚姻の式を行ひ、正しき夫婦と成て生涯を送れり。……（『切支丹鮮血遺書』第十一福者ヂダショカルヴリョ聖師及其侶の殉教）〈註一四〉

「お浜の方」が「公然、婚姻の式を行ひ、正しき夫婦」となって生涯を送ったというのである。しかも、そのことしか、書いてない。介山の「記録」というのは、これだったのだ。

「お浜の方」という呼び方が出てくる。

その上、「佐竹左京大夫義宣」と記されている。正しく、右京大夫と書かれていない。まちがいをそのまま踏襲するのは、下絵であることのより確かな証拠にはならないか。原典忠実をモットーとした介山が、ここに原典としたものに、依りかかっていることを感じさせる。デティルの類似は、そのことをますます確実視させることになる。

また『切支丹婦人』の中で、介山は殉教者を列記しているが、この『鮮血遺書』の本文、および、註によって、その人物を並べると、次のように対応していることがわかる。これは、この二つの作品が、極めて近い関係を有していることの証拠としていいであろう。最上段が『切支丹婦人』の記述、中段が『鮮血遺書』の本文、下段が『鮮血遺書』の註に加えられている殉教者の霊名である。介山の作品の五人目、マチヤス喜蔵だけは、対応する名が探せない。

幸右衛門アンショ　アレクショ幸右衛門 Alexis Coiemon.
道斎ドミニョ　ドミニコ道斎 Domingos Dosai.
孫兵衛マチヤスの妻　マテオ孫兵衛の妻 Mathieu Magobioye.
レチ権右衛門　レオ権右衛門 Leon Gonyemon.
マチヤス喜蔵
ポーロ新蔵　ポーロ新蔵 Paul Chinzo.
アンデレヤス市右衛門　アンドレア市右衛門 Andre Itchiyemon.
伊兵衛マチヤス　マチヤス伊兵衛 Mathias Ifioye.
金助ポーロ　ポーロ金助 Paul Kinsouke.
アンデレアス掃部　アンドレア掃部 Andre Camon.
其の子　ポーロ三九郎　ポーロ三九郎 Paul Sancouro.

ところが、『切支丹婦人』の中核的人物である「お清」だけはあいかわらず行方不明である。これだけは介山の創作にかかるとしていいだろうか。『大菩薩峠』の中で、新選組の史実を背景に、机竜之介が坐っているように、介山ともあろうものが、作品の中に、原典の人物のみを登場させ、自分の好みの人物像をひとりも挿入しないでおれるだろうか。この人物は、介山の創作としたほうが、『切支丹婦人』の作者介山の面目にかなうとすべきではないのか。

そう、それは苦しいがいいとしよう。しかし、はたと困ったことが持ち上って来たのである。

『切支丹婦人』のなかで、雄物川の岸近い川尻村で、老異人が捕えられる部分は次のようになっている。

……あの晩（聖母マリア上天の祝ひ日）、古納屋に集まつたものが悉く捕へられたり、自首したりしてしまつたあとへ、悠々と雄物川の岸につないであつた船の中から身を現はしたのは老異人であつた。

老異人は従容として其の流暢な日本語で

『わたくしが、切支丹の宣教師であります。ポルチュガル人で、リダッショと申しまする。何も貴方がたに対して悪いことは致しませぬ。まことの神様の教を弘めて居りました。それが悪いことならば

お縛りなさいませ』

と云つて手を後ろへ廻した。

老異人、この切支丹の布教者は、リダッショという名で呼ばれている。ところが、このテキストには、

第十一編　福者ヂダショ・カルヴリヨ聖師及其侶の殉教

となっている。

リダッショとヂダショは似てはいる。両方とも、同じに聞えないことはない。もう、いい加減で、こんなことには、けりをつけたいのだが、気になった疑問は、いつまでもついてくる。

ほんのさっきまで、デティルの類似は、原典とその展開を関連づける有力な証拠であるなんぞ、いささか得意気にのべたことが恨めしくさえなる。類似が、関係の有力な証拠となるとすれば、相違はどんなことになるのだ。決定的に無関係を示すことになりえるかもしれないではないか。

しかし、『鮮血遺書』と『切支丹婦人』は、決して無関係ではない。それはわかっている。にもかかわらず、リダッショとヂダショの違いがどうして生まれたのか。介山がいい加減に書きかえたとは考えられない。ふざけ半分で、三田村鳶魚を三田村とんびと呼んだりするようなことはあっても、名前については、神経質な面すらもっているのだから、ヂダショをリダッショといいかえていることには、何かの典拠がなければならぬ。しかし、これは、出口のない水掛け論にならないとも限らぬ危険を胎んでいる。わたしは、しばらく、行きつもどりつのくり返しを続けた。

そんなちっちゃなこと、どうでもいいじゃないか。と考えたりもしたが、ちっちゃなことの類似に、関係の濃さがあると言い切った以上、自縄自縛、ぢたばたをくりかえすだけであった。

わたしは、あくる日、人間の思い込みの恐ろしさ、思考の硬直した論理の半面性を知らされたのである。関係というのは、相対的なものであるにもかかわらず、一面しか見ない片よりをもちがちだといえることに気付いた。

介山が資料としたものが『鮮血遺書』である、とすれば、『鮮血遺書』は絶対的であって、介山のほうに何かの過誤がありはしないか、介山の周辺だけが気になっていたのである。しかし、それは、一面的見方にすぎない。『鮮血遺書』のほうに何かが働いてはいないのか、わたしは、自分の使っている『鮮血遺書』のテキストを調査することから、当然はじめるべきであったと気付いたのである。パジェスの『吉利支丹宗門史』を典拠とした『鮮血遺書』というところで、そこから、踏み入ろうとはしていなかった、自分の研究としての第一歩の手ぬかりにやっと気付くという始末であった。

わたしの使っているテキストは、大正十五年二月十三日発行の松崎実著『考註切支丹鮮血遺書』改造社版である。

これは、「ギリヨン師が京都に居られる頃、日本殉教者の祝日毎に、此れをテキストとして殉教の事実を説教した。それを信徒の一人であった加古義一氏が筆記し、その筆記をギリヨン師校閲のもとに加古氏が編纂して出版した」ものとされており、明治二十年八月二十五日出版日の日付をもつ、奥付が附され、『やまとひじりちしほのかきおき』と振仮名をして読ませてあるという原本を、松崎実が改訂編纂したものとしてある。すると、加古義一編纂に何かが加えられていることになる。凡例に、「地名人名年号などの誤謬のみならず、未熟な用語或は修辞の為に文意の通じ兼ねる箇所は、パジェスの原書と対照して本文を訂正した所が少くない。」とのべているのだから、介山が読み、資料としたかもしれないものと、違っているかもしれないだ。

さらに、加古義一編の『日本聖人鮮血遺書』は初版から六版まであり、初版の用語や修辞、地名人名の固有名詞、年代月日の過りは、漸次訂正され、初版、四版の間で多少の相違が見られるが、六版になると、初版とはよほど違って来ているという。そして、松崎本は、この六版に依っているとのべている。初版から四版までは、四六版の四〇〇頁というが、六版は、本文四二〇頁、外篇と附録あわせ、総頁五五二となり、六版は改版と考えてもいいと、松崎実の解説はのべている。そして、本来ならば、初版に依るべきであるが、史籍としての価値を考えて、六版に依ったとのべている。

とすると、介山は、加古義一の初版から四版まで（松崎実解説によると、五版は手もとにないから不明とことわってある）のどれかに依ったのかも知れないのだ。

初版から四版までの「目録」は次のようになっているというのである。

前文に続いて

二月五日　日本二十六聖人の祭礼

二月二十二日　福者リダッショカルバリヨ聖師の祭礼

三月十七日　聖母マリア取次の謝礼是則日本教会の復活……

と暦日順に並べられている。

この、二月二十二日の祭礼こそ、リダッショカルバリヨ聖師の祭礼として表記されていたのである。

介山は、たしかに、この表記に従っていることになる。殉難者に対応のなかったマチヤス喜蔵のことも、まさにこの改訂に従ってのことであったのである。

これだったのだ。やっと到達したと思ったときに、うんざりしてし

まった。

そして、

中里介山の『切支丹婦人　佐竹左京大夫の愛妾』のモチーフは『切支丹鮮血遺書』のなかにある。

と書いたまま、放り出してしまったのである。

註一　筑摩書房版『中里介山全集第十四巻』巻末解説　S46・9・30

二　大菩薩峠刊行会『切支丹夜話』S・7・12・8（第三版）所収『切支丹婦人』の巻末、結びの部分

三　『大菩薩峠』京の夢おう坂の夢の巻五十三以降、山科の巻六十一以降七十四まで

筑摩書房版『中里介山全集第十二巻』所収

四　J.Crasset, Histoire de l'Eglise du Japon. Paris 1689.

五　『日本西教史』下巻　奥附は　太政官蔵版　明治十三年十二月出版　印行所　東京日本橋区呉服町拾弐番地　坂上半七　となっている。八五三頁～八五五頁

六　『日本西教史』下巻　八四〇頁

もともと『日本西教史』の表現には句読点、読みがなはつけていないが、便宜上、平島がつけた。誤読等の罪は平島にある。

七　『南蛮寺興廃記・妙点問答』海老沢有造訳　平凡社　東洋文庫14　九頁

八　『新村出全集』第五・六・七巻　南蛮紅毛篇ⅠⅡⅢ　筑摩書房

九　Die Geschichte Japans（1549～1578）von P.Luis Frois　訳は柳谷武夫　東洋文庫『日本史』1・2・3・4巻　平凡社

Biblioteca da Ajuda. Cod 49-iv 56.ff.55-114v 116-145v

Alessandro Valignano　訳は松田毅一他『日本巡案記』　東洋文庫　平凡社

一〇　岩波書店　日本思想大系『キリシタン書　排耶書』には『どちりいなーきりしたん』以下、キリシタン書が九部、『排耶蘇』以下、排耶書が五部収録され、対校、解説が詳しい。また、朝日新聞社　古典全書『吉利子丹文学集』上・下には、別に記した内容で、キリシタン文学の案内書として最適のものである。

一一　木下杢太郎は、明治四〇年、北原白秋らと、島原、天草を巡歴し、南蛮趣味の作品をものするようになったことは有名であるが、介山への影響はない。

一二　十四頁参照

一三　『日本切支丹宗門史』岩波文庫版による。以下、引用はすべて同じ。引用は原文に忠実に抄出してあるが、多少、読みがなを追

加した。読みがなについての、読み誤りがあるとすれば、責任は平島にある。

一四　『切支丹鮮血遺書』の表記は、すべての漢字に読みがながつけてあるが、わずらわしいので、特殊な読みかたをしている部分をのぞいて、すべて、つけないことにした。また、原文は、句読点を附されていないので、引用の場合には、句読点を、平島がつけ加えた。適当でない句読点があるとすれば、平島の責任である。

また、介山の著作『切支丹夜話』にしても、全部の漢字に読みがながつけられるのを原則としているが、やはり、わずらわしいので、特殊な読みかたをしていない漢字の振りがなは、とってある。

高松短期大学研究紀要

第 20 号

平成2年1月31日　印刷

平成2年1月31日　発行

編集発行　高松短期大学

〒761-01　高松市春日町960

TEL（0878）41－3255

FAX（0878）41－7158

印　刷　高東印刷株式会社

高松市東山崎町596番地